

佐々木寛子

たんたんとした表現ながら、ドラマチックな人生の物語をうたい込んだ一首。物語を抱いた短歌は古典に多くあるのはご存じのとおり。短編小説のような作である。ただ、「元妻」はネット語、マスコミ語として通用しているが、どうだろう。一番大きな日本語辞典『日本国語大辞典』を開いてみると未掲載。ネットでは英語の「オリジナル・ウィフ」の訳語とあるが、その出自について、私には分からない。

父よりも太く大きく育ちゆけ、やんばるの男の子で、

健太郎

屋良健一郎

父親になりたての作者の、父としての一語。下句のひびきが、いい。何度も声に出して発音してみると、リズムとひびきのよいことが分かる。記念の短歌として、大切な一首になるだろう。

透明人間のようにいたい一日職員室 右の電話と左

の会話と

岩月ふみ

社会的な関係性をしばらく遮断したいときが誰にでもある。そんな気分が主題。ここは職員室。教室ではわがままを言えないが、職員室では許してよ、といった気分だろう。微妙な気分取材した取材感覚に注目する。が、上句のリズムがいかに悪い。「一日」は削除した方がいい。

キャンベラから車でとばし六時間ワガワガを過ぎへ  
イと言ふ町  
ラム直子

オーストラリアの田舎町をたずねた折の作らしい。こ

うして片仮名で表記されると、「ワガワガ」も「ヘイ」も、町の名前というよりも、発音されたときの音の楽しさだけがクローズアップされる。定型詩の不思議である。

読み馴れぬくずし字ついに読み解けば江戸の民衆の

声聞こえたり

青山仁

古文書を読む史学科の授業にかかわる歌らしい。解説が進むにつれて、江戸期の人々の生活の場面が見え、生活の音声が聞こえはじめたの意味。少しずつ解明される動きが読めて、いい。欲を言えば、読解の場面がもう少し具体的だと、読者には楽しかった。

被爆資料十分間の見学で大統領が見てきたること

辻尾修

米大統領の広島訪問である。今月の一連には、教師としてどう教室でしゃべるかという角度が意識されている分だけ、新聞やテレビニュースより深いところで訪問がとらえられている。十分間では何も見られるはずはない。原爆を落とした国の人間なのに謝罪しなかった。わざとぼかしたかたちの結句に、教師としての自分と、一個人としての自分の乖離を讀んでいいのかも知れない。

ひとりふたりぬしが消えたり午前四時の湯気と散り

たる藤のあはひに

岸並千珠子

露天風呂だろう。早朝の静かさをクローズアップするかたちの第一、二句がうまい。午前四時という具体的な表現が、一首に具体的な手ざわりをもたらしている。